

・心理測定・

大学生の社会的スキル尺度構成の試み

毛 新華^① 大坊郁夫

【概要】目的：中国版の社会的スキル尺度を構成する。方法：中国人の人間関係を描く96の候補項目を用いて、アメリカ、日本の3つの社会的スキル尺度と共に、604名の中国人大学生を対象にアンケート調査を行った。結果：探索的因子分析を行い、「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」という4因子を含む41項目で構成された大学生社会的スキル尺度(Chinese University-students Social Skills Inventory: ChUSSI)が得られた。4つの因子の内的一貫性を表すクロンバックの係数は.70～.89であり、test-retestの相関係数は.64～.71であった。I-T相関係数はすべて.44以上であった。各因子と既存の社会的スキル尺度との間に正の相関関係($r=.14\sim.65$)が存在している。被調査者の基本属性による因子の得点の違いは尺度の妥当性を検証した。結論：この尺度の信頼性と妥当性が充分あり、大学生の社会的スキルの測定に用いることが可能である。

【キーワード】 社会心理学 社会的スキル 心理学測定 尺度 中国人大学生

The Development of Chinese University-students Social Skill Inventory

MAO Xin-Hua, Daibo Ikuo, Graduate School of Human Sciences, Osaka University

【Abstract】 **Objective:** To develop a native social skill inventory for Chinese university students. **Methods:** Adding 3 scales made in U. S. A. and Japan to 96 items that described Chinese interpersonal relations, a questionnaire was administered to 604 university students. **Results:** A 41-items inventory named Chinese University-students Social Skill Inventory (ChUSSI) was developed. , four factors named Partner's Mianzi (PM), Sociability (SA), Altruistic Behavior (AB), Connection Orientation (CO) were found. Internal Consistency of the four factors ranged from 0.70 to 0.89. The test-retest reliability coefficients ranged from 0.64 to 0.71. The correlation coefficients of items and corresponding factor were higher than 0.44. The relationship of each factor with existing scales and the different of factor mean by sex, age, and special field of study show ChUSSI's validity. **Conclusion:** The reliability and validity of ChUSSI are verified.

【Key Words】 social psychology; social skill; psychometric studies; inventory; Chinese university-student

社会心理学という領域では、「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル」¹ という定義がある。個人の社会的スキルへの測定はよく社会的スキル尺度を用いる。「社会的スキル尺度」に関する研究では、欧米及び日本では盛んに行われてきて、多くの成果があった。米国で代表的な尺度として、Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo (1980)の感情的コミュニケーション尺度(Affective Communication Test: ACT)² がある。日本では、Takai & Ota (1994)の日本的対人コンピテンンス尺度(Japanese Interpersonal Competence Scales: JICS)³ や菊池(1988)のKiSS-18(Kikuchi's Social Skill Scale · 18items, KiSS-18)などがある。

中国においては、多くの心理学者は社会的スキル

の概念に関心を示す^{4,5}と同時に、多くの外国の社会的スキル尺度を修訂し、応用した^{6,7,8}。しかし、童(2002)は中国で使われている翻訳尺度についてレビューした上で、輸入尺度が開発国の人々の心理特性に基づいて開発されたものであり、完全に中国人に適用できると言えないと主張した⁹。庄・甘・刘(2004)の研究では、欧米において重要とされる社会的スキルは中国文化ではその適応性が失われたと指摘した⁶。

Takai & Ota(1994)では、日本で使われている翻訳版尺度が文化の等価性の問題があり、日本人サンプルを用いて作成した尺度は翻訳版尺度より高い信頼性と妥当性が得られると指摘した³。

これらのことにより、以下のことを推論すること

ができる。すなわち、中国文化の独自性^{10 11 12}によって育った社会的スキルを測定するには、中国文化に根付いた社会的スキル尺度が必要とされる。

本研究では、中国人大学生をサンプルとし、中国社会事情にふさわしい、中国人の対人関係にあう社会的スキル尺度を構成し、中国人の社会的スキルの基本的因子構造を討論し、尺度の信頼性と妥当性を高める。

対象者と方法

1.1 対象 大連市にある3つの大学の大学生604名。回答に明らかに不備のある11部のアンケートを除き、最終的に593部の有効回答が得られた。男性297名、女性は290名、未回答は6名であった。また、文系(外国語、歴史、行政、管理、芸術)の学生は335名、理系(機械、材料工程、交通、電気、情報)の学生は251名、未回答は7名であった。一回生から四回生の人数はそれぞれ204名、95名、249名、29名で、未回答は16名であった。回答者の年齢は17.08~26.25の間であり、平均年齢は 21.01 ± 1.37 であった。また、145名回答者を対象に、8週間後に再テストを行った。

1.2 候補となる調査項目の収集

2004年7月~9月、日本に留学する中国人留学生56名(男性26名、女性30名、平均年齢 28.30 ± 3.61)と中国に留学している日本人留学生66名(男性27名、女性39名、平均年齢 25.76 ± 4.73)を対象に、自由記述調査を行った。

調査では、中国人同士の関係で人づきあいがうまい人の特徴、中国人同士の関係で人づきあいが苦手(下手)な人の特徴、中国人同士の人づきあい(人間関係)において、「中国人に特有」と言える特徴という3つの質問を中国人留学生と日本人留学生の共通の質問と設定した。さらに、中国人留学生に「中国で人と良い関係を築くに、気を配る面や行った行動」、日本人留学生に「中国人との関わりを通して、中国人の付き合い方は日本人の付き合い方と違うところ」をそれぞれ一つの質問を加えた。

この8問の自由記述調査から、中国人の人間関係に関する記述は延べ999箇条が得られた。社会心理学を専攻とした2人の大学院生によって、これらの回答を分類・整理し、最終的に22のカテゴリー、合計96項目にまとめた。これらの96項目のそれぞれに9件法を求めた。

1.3 使用尺度

1.3.1 KiSS-18: 5件法、18項目である。この尺度は青年として一般的に備える社会的スキルを測るものである。尺度の信頼性は毛(2005)の中国人高校生を対象とした研究で確認された⁷。

1.3.2 感情的コミュニケーション尺度(ACT): この尺度はFriedmanら(1980)によって作成された。全部で13項目であり、非言語的表出能力を測定

している。9件法で回答を求めた。

1.3.3 日本人対人的コンピテンス尺度(JICS): この尺度は22項目で、察し能力(PA)、自己抑制能力(SR)、上下関係への対応能力(HRM)、対人感受性(IS)、不明瞭性への忍耐力(TA)という五つの下位尺度に分かれている。それぞれの尺度が独立に成り立っている。五件法で回答を求めた。Hall(1976)の指摘した「中国と日本が同じ高コンテキスト文化に属する」¹³こととTriandis(1995)の指摘した「中日両国が同じく集団主義に属する」¹⁴ことを受けて、中日両国ではある程度の共通性があると判断される。また、高井ら(1994)の言う「日本的対人コンピテンス尺度」がアジア全体に適用できるという主張を踏まえた上、本研究はこの尺度を取り入れた。

KiSS-18とJICSの中国語翻訳は日本の大学院で勉強し、日本語の勉強経験は7年以上、留日経験は4年以上の5名の中国人留学生によって行われた。

1.4 手続 2005年3月末に(再テストは2005年5月)、心理学授業と自習時間を利用し、冊子になっている前述した4つの尺度に基づいて作成したアンケートを配り、記入してもらった後、その場で回収した。また、2回の調査のどちらでも、調査対象者への謝礼として文具を渡した。

1.5 統計方法 探索的な因子分析、相関分析、*t*検定などを行った。

結果

2.1 探索的因子分析の結果

正式に因子分析を行う前に、96項目に対して、平均値と分散から検討した。平均値が7.0を上回る項目と3.0を下回る、いわゆる天井床効果のある項目が削除された。また、0.2を基準に、分散の小さい項目を削除した。さらに、KiSS-18の得点を高低二群に分けて、外的基準として導入し、96の候補項目を検証し、有意差のない項目を削除した。これによって、効果的因子分析が可能となる。

以上の三ステップを踏まえた上、21項目が削除された。残された75の良好な状態の項目に対して、因子分析(共通性の初期値としてSMCを用いて、反復推定を行う主因子法)を行った。複数の因子への負荷の高い項目及び最終共通性の低い(0.20以下)項目を考慮して、尺度項目を選択しながら、繰り返し因子分析を行った結果、41項目が残り、固有値の減衰状況や解釈の可能性から4因子を抽出したのちpromax回転を行った(表1、2)。因子1は「相手の面子(Partner's Mianzi)」と命名した。得点の高い者は極力相手の面子を気にする。因子2は「社交性(Sociability)」と命名した。得点の高い者は社会活動では積極的である。第3因子は「友

表1 大学生社会的スキル尺度の因子分析(Promax斜交回転)及びIT相関

因子と項目	要素 負荷量	h ²	題总 相関
第1因子:相手の面子(=.89, 因子寄与=4.664)			
q85 相手のことを尊重するように気をつけている。	0.71	0.52	0.70
q72 私はいつもヘリクだった態度でいるように心がけている。	0.62	0.39	0.62
q75 相手の面子を潰さない。	0.59	0.45	0.66
q25 私は相手の意見を尊重する方である。	0.58	0.40	0.62
q63 つき合う相手の短所に触れることを極力避ける。	0.58	0.32	0.59
q28 できるだけ相手が嫌がる話題や相手と意見対立しそうな話題を避ける。	0.58	0.32	0.59
q65 いつも相手の面子を立てるよう心がけている。	0.56	0.45	0.62
q38 いつも笑顔で人とつき合う。	0.56	0.40	0.62
q50 物腰が柔らかいとよく言われる。	0.55	0.42	0.63
q83 目上の人に常に敬意を表す言葉遣いをする。	0.55	0.34	0.58
q36 相手に遠慮する。	0.53	0.24	0.52
q37 人のプライベートなことにあまり触れない。	0.52	0.25	0.50
q88 いろいろ考えて、最も妥当な方法で目上の人や友達とつき合う。	0.51	0.40	0.59
q79 人と比べて、喧嘩したりなど争いごとが多い。	-0.50	0.23	0.44
q86 いつも人と協調するように心がけている。	0.49	0.26	0.52
q89 ばつが悪い時、私はいつも相手に引っ込みがつかないようにする。	0.49	0.36	0.60
q52 人づき合いの中で、私はとても我慢強い方である。	0.45	0.31	0.58
q53 話をしている相手の長所によく触れる。	0.34	0.21	0.48
q13 私はいつも相手の立場に立って物事を考える。	0.31	0.23	0.47
第2因子:社交性(=.86, 因子寄与=3.065)			
q41 人と一緒にいる時、共通の話題をすぐ見つけることができる。	0.70	0.48	0.69
q09 見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる。	0.64	0.45	0.67
q78 人見知りせず、どこでもとびこんでいける。	0.64	0.48	0.72
q06 私は、周りの人の感情をどうすればうまくコントロールできるかを知っている。	0.64	0.43	0.68
q10 人に暖かく接する。	0.64	0.45	0.66
q21 自ら人と親しくなろうとしない。	-0.60	0.32	0.62
q74 いろいろな人とつながりを持っている。	0.57	0.51	0.72
q90 自分から積極的に話しかける。	0.51	0.30	0.59
q30 人に頼りにされることがよくある。	0.48	0.30	0.59
q29 自分の話で人を笑わす自信がある。	0.46	0.26	0.57
q18 どうすれば周りの人たちをまとめることができるかわからない。	-0.39	0.20	0.50
q62 誰とでも仲良くつき合うことができる。	0.39	0.23	0.50
第3因子:友人への奉仕(=.72, 因子寄与=1.432)			
q34 友達と一体感をもってつき合う。	0.65	0.41	0.69
q66 友達との間で損得の衝突が生じた時には、相手に譲る。	0.62	0.38	0.64
q42 気前がよく、お金のことでけちけちしない。	0.51	0.30	0.67
q54 友達とのつき合いでは、自分がちょっと損しても構わないと思う。	0.45	0.42	0.65
q14 友達が困っている時に力を貸してあげる。	0.42	0.31	0.61
q70 よく友達を家に招く。	0.39	0.26	0.61
第4因子:功利主義(=.70, 因子寄与=1.547)			
q47 自分に役に立つ者と積極的につき合う。	0.60	0.39	0.73
q92 普段、私はできるだけたさんのコネを作るように心がけている。	0.59	0.49	0.76
q80 私は人脈を重視する方である。	0.54	0.44	0.73
q32 飲食のつき合いをコミュニケーションの手段とする。	0.49	0.27	0.68

反転項目

因子寄与の数値はVariance Explained by Each Factor Eliminating Other Factorsによる

表2 回転後の軸の相関係数

因子名	相手の面子	社交性	友人への奉仕
社交性	0.33		
友人への奉仕	0.39	0.41	
功利主義	0.12	0.35	0.08

表3 信頼性と再テスト信頼性

因子名	信頼性 ()	再テスト信頼性 (r)
相手の面子	0.89	0.69**
社交性	0.86	0.64**
友人への奉仕	0.72	0.71**
功利主義	0.70	0.67**

**P<0.01

表4 大学生の社会的スキルの因子間及び既存尺度との相関関係

	相手の面子	社交性	友人への奉仕	功利主義
社交性	.37***			
友人への奉仕	.38***	.44***		
功利主義	.19***	.41***	.14***	
ACT	.18***	.62***	.26***	.34***
KiSS18	.47***	.65***	.45***	.27***
察知能力	.31***	.35***	.20***	.19***
自己抑制	.41***	.16***	.13**	.18***
階層関係調整	.52***	.31***	.21***	.19***
対人感受性	.20***	.42***	.19***	.27***
曖昧さへの耐性	-.17***	-.14**	-.07	.02

p<.01,*p<.001,

人への奉仕(Altruistic Behavior)」と命名した。得点の高い者はより友達に尽力する。第4因子は「功利主義(Connection Orientation)」と命名した。得点の高い者は自分の社会的関係ネットワークを極力に広げようとする。

2.2 信頼性・再テスト信頼性・I-T 相関および因子間相関

4つの因子の内的一貫性を表すクロンバックの係数は.70~.89であり、8週間間隔のtest-retestの相関係数は.64~.71(p<.01)であった(詳細は表3)。それぞれの項目と因子の相関係数は表1の右側にある。それによると、すべての相関係数は0.44以上(p<.01)となっている。表4は因子間の相関係数および因子とほかの社会的スキル尺度との相関係数である。

2.3 妥当性分析

2.3.1 KiSS-18, ACT, JICS(五つの下位尺度)を外的基準として、本研究で得た因子がこれらの既存尺度との相関を検討することを通して、因子の妥当性を検討した。その結果、4つの因子のうち、「友人への奉仕」と「功利主義」因子は「不明瞭性への忍耐力」との相関が有意でないが、ほかの相関はすべて有意であった。

表5 グラフィック変数による因子得点の違い

因子名	性別			年齢			文理の区分		
	男(N=292)	女(N=284)	t値	低年齢(N=168)	高年齢(N=413)	t値	文系(N=336)	理系(N=246)	t値
相手の面子	122.01 ± 16.95	121.59 ± 16.27	0.31	119.91 ± 15.86	122.69 ± 16.81	1.85	123.14 ± 17.04	120.15 ± 15.78	2.16*
社交性	63.16 ± 14.10	65.31 ± 12.71	1.92	60.68 ± 13.98	65.74 ± 12.92	4.19**	65.89 ± 12.63	62.06 ± 14.16	3.44**
友人への奉仕	35.70 ± 6.69	35.02 ± 6.10	1.28	34.38 ± 6.87	35.78 ± 6.14	2.44*	35.67 ± 5.92	34.97 ± 6.96	1.29
功利主義	21.15 ± 5.64	19.56 ± 5.71	3.37**	19.79 ± 5.35	20.60 ± 5.85	1.58	20.66 ± 5.75	19.96 ± 5.65	1.47

* $P < 0.05$, ** $P < 0.01$

2.3.2 因子の得点の性差、年齢差そして文理の専攻での差(表5)

表5に示したように、「功利主義」因子の得点において、男子大学生は女子大学生より高くなっている($t(584)=3.37, p < .001$)が、他の因子においては性差がなかった。

20歳を基準に、サンプルを年齢の低群と高群(低群は20歳及び20歳以下、高群は20歳以上)に分けて、各因子の年齢差を検定した。全体的に、高群の平均点が低群より高い。特に、「社交性」と「友人への奉仕」の両因子において、有意に高くなっている(順に、 $t(580)=3.89, p < .001$; $t(589)=2.44, p < .05$ となっている)。

文系と理系の大学生の各因子における得点の差を検定したところ、文系の学生は「相手の面子」因子($t(582)=2.16, p < .05$)と「社交性」因子($t(580)=3.44, p < .001$)において理系の学生の得点より有意に高くなっている。なお、全体の傾向として、文系の学生の得点が理系の学生より高くなっている。

考察

本研究は、翻訳版の社会的スキル尺度に存在する文化の等価性の問題を解決し、中国人大学生を対象に、中国の社会的スキルを構成する要素を探り、中国の社会事情や中国人の特徴に適し、中国文化にふさわしい社会的スキル尺度を開発することを目的としている。尺度作りの項目収集と探索的因子分析を通して、最終的に「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」と「功利主義」の4因子、計41項目を含む中国大学生社会的スキル尺度を構成した。

4つの因子のうち、「社交性」因子の内容は庄ら(2004)の研究6で得られた「社会適応」因子と良く似ている。この因子の中国における実際の存在が確認できた。また、この因子はBuhmester(1988)的「対人的有能性尺度」(Interpersonal Competence Questionnaire: ICQ)の「関係開始」因子¹⁵、日本の今野・堀(1993)が作成した「大学生の対人円滑性尺度」の「他者に打ち解ける自己表出」因子¹⁶、そして、菊池(1988)のKiSS-18の一部の項目とも似ている。各国に存在するということから、この因子の文化的普遍性を有するかもしれない。実際に、どの文化においても、口を開けて人が自動的に自分に関わってくるのを待って、円滑な人間関係を形成させるのはほとんど不可能である。自らの十

分な積極性と能動性を持って人と関わることこそ、円滑な人間関係の形成が可能となる。本研究で得た「社交性」因子は大学生の人間関係における能動性と積極性を含んでいる。

日本の堀毛(1994)、高井(1994)では、社会的スキルが通文化的な側面とある文化に基づく特有な面があると指摘した^{17,18}。文化的に共通に存在する「社交性」因子と比べて、本研究で得た「相手の面子」、「友人への奉仕」と「功利主義」の3つの因子は中国文化の特殊性を反映しているものとなり、これまでの社会的スキル尺度では存在しなかった。

「面子」という概念が中国人に対する重要性は多くの先行研究で論じられていた。Cheungら(1996)では、中国文化では、面子と人間関係が密接に関連している¹²。佐(1997)は中国人の面子の構造を考察した上、面子は社会的交換に使われ、中国人が自分の面子を重視すると同時に、他者の面子にも気をつける¹⁰。本研究では、周りの人とよい関係を作るという目的に、大学生は自分の面子より、相手の面子を重視する。相手の面子をどのように扱うかが自分と相手の関係を決める。自分が相手の面子を保たなかったり、相手の面子を潰したりすると、相手の自尊心に傷つき、相手の自分に対する極度な不満、怒りを引き起こす。逆に、相手の面子立てたり、相手の面子を守ったりすることは、相手の社会評価の維持と向上につながる。結果的に、相手が自分に好印象を持ち、双方に密接な関係の形成を促し、関係がより円滑になる。

儒教の発祥国中国では、儒教の影響力は今日の時代においても強い。儒教の人間関係論の中でも、「仁」の考え、すなわち「己の如く人を愛せよ」ということは重要な位置を占め、人々に「人を助ける」ことを美徳であると教えた。乐(2002)はこのような考え方は現代中国社会においても力強く影響力を發揮し、人々の行動様式を強く規定していると指摘した¹⁹。本研究の「友人への奉仕」因子は大学生の間での「仁」の精神の反映だと考えられる。

周(2005)は経済の発展が急ピッチで進んでいる中国では、これまで主流だった感情型人間関係(感情で結ばれている)は理性型人間関係(権利、富などで結ばれている)に移行しつつあると指摘した²⁰。実社会に出ることを控えている中国人大学生は日々社会の変化を敏感に受け取り、食事のつきあいなどの手段により、より多くの人と知り合い、人脈を結び、自分の社会ネットワ

ークを広げる。彼らは、これらのことを身につける必
中国心理衛生雑誌 2006年 第20巻 第10期 キルと考
えるかもしれない。

本研究で得られた4つの因子の内的一貫性を表すク
ロンバックの係数と再テスト信頼性がともに本研究
の尺度の安定性を表している。4つの因子が外的基準と
して導入された社会的スキル尺度とのほとんどに相関
関係が存在する。関連の規模と程度から、本研究で得
られた社会的スキル尺度の因子は社会的スキルの妥当
な指標とすることができる。

また、グラフィック変数による因子得点の違いからも
本研究の尺度の妥当性を検討することができる。社会
的スキルのレベルは年齢とともに、上昇していく。菊
池(1994)によると、社会的スキルは高校生、大学生、成
人の順に高くなっていく²¹。本研究のサンプルの年齢
構成が限られているが、得られた「年齢の高群の平均
点が低群より高い」という結果は、こういった先行研
究の結果を反映していると言えよう。

本研究の結果により、文系の大学生の得点が理系の大
学生より高くなっている。菊池(2003)では、大学生の専
攻に基づき、日本の大学生の社会的スキルの得点を比
較し、将来の仕事内容が頻繁に人間関係に関わる専攻
-看護、福祉-の大学生の得点は将来にコンピューター
、機械などを仕事対象とするソフト情報専攻の大学
生より高い²²。本研究の文系(外国語、歴史、行政、管
理、芸術)の大学生の各因子での得点が理系(機械、材料
工程、交通、電気、情報)の大学生より高いことは先行
研究の結果を検証したと言えよう。

本研究の今後の課題としては次の通りである。まず、
因子の項目数はバランスがとれるように、尺度を標準
化する。同時に、信頼性と妥当性確保する。そして、
適用できる対象を成人まで拡大し、より広い対象に適
用できるように改訂バージョンを作成する。そして、
通文化的研究を通して、「社交性」が文化共通的なもの
であることを検証する。

本研究の調査の実施あたりまして、遼寧師範大学心理
学部胡金生講師により多大な協力を頂きました。

- 1 菊池章夫, 著. 思いやりを科学する. 川島書店, 1988.
- 2 Friedman HS, Prince LM, Riggio RE, et al. Understanding and assessing nonverbal expressiveness: The affective communication test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1980, 39: 333-351.
- 3 Takai J, Ota H. Assessing Japanese interpersonal communication competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 1994, 33: 224-236.

- 4 秦启文, 黄希庭. 社会技能构成因素及其意义. *心理学探新*, 2001, 21(1): 54-57.
- 5 于鲁文. 社会技能量表简介. *心理发展与教育*, 1994, 2: 28-32.
- 6 庄明科, 甘怡群, 刘海骅. 社会技能量表的修订与初步应用. *中国心理卫生杂志*, 2004, 18: 755-759.
- 7 毛新華. 社会的スキル測定尺度 KiSS-18 の中国の若者への適用. *対人社会心理学研究*, 2005, 5: 85-91.
- 8 毛新華, 大坊郁夫. 社会的スキル測定尺度 KiSS-18 の中国における適用可能性に関する検討. *日本社会心理学会第 45 回大会論文集*. 2004, 282-283.
- 9 童辉杰. 审视与瞻望: 心理学的三大测验技术. *南京师大学报(社会科学版)*, 2002, 3: 82-89.
- 10 佐斌, 著. 中国人的脸与面子. 武汉: 华中师范大学出版社, 1997. 135-204.
- 11 黄光国, 著. 中国人的权力游戏. 北京: 中国人民大学出版社, 2004. 1-39.
- 12 Cheung FM, Leung K, Fan RM, et al. Development of the Chinese personality assessment inventory. *Journal of Cross-cultural Psychology*, 1996, 27: 181-199.
- 13 Hall ET. *Beyond culture*. Doubleday & Company, Inc., 1976.
- 14 Triandis HC. *Individualism and collectivism*. Westview Press, Inc., 1995.
- 15 Buhrmester D, Furman W, Wittenberg MT, et al. Five domains of interpersonal competence in peer relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1988, 55: 991-1008.
- 16 今野裕之, 堀洋道. 大学生の対人円滑性についての研究 - 対人関係についての自己評価・他者評価との関連から -. *教育相談研究*, 1993, 5: 1-10.
- 17 堀毛一也. 社会的スキルを測る-人あたりの良さ尺度. 見: 菊池章夫, 堀毛一也. 編 *社会的スキルの心理学* 川島書店, 1994, 168-176.
- 18 高井次郎. 対人コンピテンス研究と文化的要因. *対人行動学研究*, 1994, 12: 1-10.
- 19 乐国安, 主编. 当前中国人际关系研究. 天津: 南开大学出版社, 2002. 168-170.
- 20 周建国, 著. 紧缩圈层结构论. 上海: 上海三联书店, 2005. 82-85.
- 21 菊池章夫. 社会的スキルを測る-KiSS-18のこと. 見: 菊池章夫, 堀毛一也. 編 *社会的スキルの心理学*. 川島書店, 1994. 177-183.
- 22 菊池章夫. 社会的スキルを考える. *教育と医学*, 2003, 51: 4-10.